文化資料館調査研究報告(26)：41-44, 2017

エコミュージアムにおける展示手法に関する研究

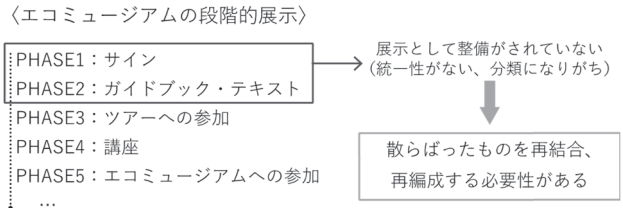
ー地域資源のネックレス化に着目してー

高橋　絵里[1]

1．研究の背景と目的

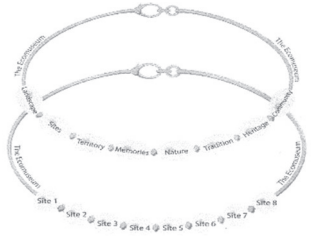
社会・経済の急速な成長の中で、街のアイデンティティが失われ、均質化が進んだ都市に、新しい地域づくりの手法としてエコミュージアム[2]活動が展開されてきた。日本では1980年代から取り組みが始まり、地域の内向的な活動がより深まることで街づくりへの効果が期待されている。

多くのエコミュージアムでは、地域資源の「現地保存」という理念を重視するあまり博物館機能としての「展示」が整備されにくいのが現状である。地域に入り込んでツアーガイドと街を巡り講座に参加することは面的に地域を知ることができるが、訪問者には敷居が高く、「段階的な展示のあり方」が必要とされている。また、地域に散らばったままの資源を、単にあるまま陳列するのではなく、それらをつなぎ合わせることで、ある解釈を与え、あるいはストーリーが得られることを示す必要がある。(図1)



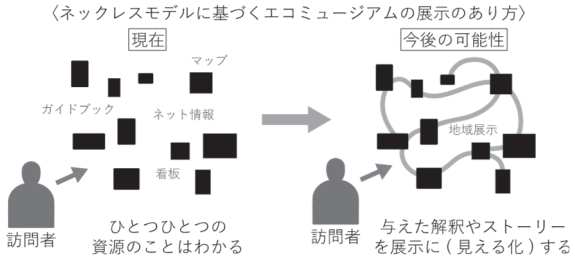
▲図1　エコミュージアムの段階的展示

これに関してP.Davis[3]は「真珠ひとつひとつではネックレスにならない」という詩の一節を借りて、ひとつひとつの真珠を地域資源などエコミュージアムの構成要素とし、それらを結ぶネックレスの糸がエコミュージアムの役割であると例えている。(図2)



▲図2　エコミュージアムにおける地域資源のネックレスモデル

そこで、本研究では、ネックレスモデルに着目し地域資源をストーリーでつないでいく展示の可能性を探る。(図3) また、住民が地域の価値を再発見し、地域について考える人が一人でも増えるための展示手法のあり方について考察することを目的とする。



▲図3　ネックレスモデルに基づくエコミュージアム展示の提案

2．研究の方法

①日本各地のエコミュージアム6か所の具体的な展示手法に関して、関連団体にヒアリングを行い、その実態を把握し、今後の展望と課題を考察する。

②エコミュージアムにおける展示では、各資源の関連によるテーマやストーリーが重要である。その潜在的なテーマを見出すために、ちがさき丸ごとふるさと発見博物館において、参加者および一般市民へ地域資源の評価指標を探る調査を行い、評価グリッド法[4]により地域資源の評価を構成している概念の抽出を試みた。調査は、2016年11月25日から12月5日、企画展「丸ごと101」の会場となった茅ヶ崎ショッピングセンターにおいてちがさき丸ごとふるさと発見博物館の関係者（以下〈丸博〉）21名および来訪者の一般市民（以下〈一般〉）23名の計44名に対して行った。調査の内容は、茅ヶ崎市内に点在する52の地域資源について「茅ヶ崎のお気に入りの場所、人に案内したいところ」というテーマにおいて5点満点で評価をしてもらう。5段階に評価された資源について、下位項目と上位項目を比較することで、被験者の評価基準を抽出し、展示の核となる概念を分析、提案する。

A study on exhibition of Ecomuseum -Based on necklace model of local heritage-
Eri TAKAHASHI
Keywords: ecomuseum, exhibition, necklace model

▼表１　各地事例のまとめ

名称	阿智村全村博物館構想	おおくすエコミュージアム	勝山市エコミュージアム協議会	朝日町エコミュージアム	館山丸ごと博物館	ちがさき丸ごとふるさと発見博物館
コア施設	はゝき木館	なし	なし	コアセンター「創遊館」	活動拠点施設はあり	茅ヶ崎文化資料館
ロゴマーク						
施設内展示	・はゝき木館における企画展示…地域の歴史展示、イベント時に展示。	なし	・イベントでの出店展示 地域のイベントやお祭りの際に、展示コーナーを確保して展示を行うこと。常設展示は行っていない。	・創遊館での展示 コアセンターのエコミュージアムコーナーにサテライトの情報などの展示を行う。	・小谷家での展示 青木繁記念館として開館した小谷家住宅において、青木繁と館山の関わり、歴史を解説している。	・企画展 H24から毎年開催。既存の活動をつなぎ、ネットワーク型の事業推進体制を実践する意図で開催。
街中展示	・サイン計画 2015年より庁舎内プロジェクトチームを設け、看板作成を行う。	・大楠山登山道入口の展示 ・樹木の名札付けワークショップ ・芦名堰の看板	・地域資源解説板（20か所） ・勝山市まちなか案内板 ・エコミュージアム明示看板	・サテライトマップ ・QRシール（16か所） 現在は利用できない	・（地域資源説明ボード） 市の作成するものにお手伝い	・都市資源説明板 平成27年12月時点で33基設置
既存の街中看板	・村民手作りの解説看板 ・明示看板 ・案内看板 ・大澤部落内の地区総合案内看板	・横須賀市による資源明示・解説看板 ・横須賀市による前田川総合案内看板 ・横須賀市による誘導看板	・ジオパークによる地域資源説明板	・朝日町による案内・誘導看板（ビューポイント） ・朝日町による解説・明示看板 ・その他施設の案内・解説板	・館山市による誘導・解説板 ・館山市による解説板 ・その他施設の誘導・案内・解説板 ・QRコード	・茅ヶ崎市による誘導看板 ・各資源の解説板
誘導(矢印など)	×	×	×	◎既存看板の利用	×	×
案内（地図など）	◎サイン看板に全体地図	×	×	◎既存看板の利用	×	○手作りマップ
解説	◎サイン看板	○ガイドブック	◎地域資源説明板	◎既存看板の利用	○市と共同作成	◎都市資源説明板
明示（名のみ）	○サイン看板	○蘆名堰の看板	◎石造りの看板	○既存看板の利用	○市と共同作成	◎都市資源説明板
統一性	◎ロゴマーク有	×ロゴマークなし	ジオパークと混同	○表記のみ有	×ロゴマークなし	◎ロゴマーク有
その他の展示	ウェブサイト	・ガイドブック ・浄楽寺説明パンフレット ・地域資源案内パンフレット ・ウェブサイト	・ガイドブック ・エコミュージアムニュースの発行 ・Facebook	・ガイドブック ・DVD ・まち宝ものかるた ・パンフレット（部数がなくなった） ・ウェブサイト	・市民マップ ・各種テキスト ・パンフレット ・DVD ・ウェブサイト	・ガイドブック ・市民による手作りマップ ・常設展リーフレット ・季刊誌 ・ウェブでの動画（丸博TV）

３．日本各地のエコミュージアムにおける展示手法

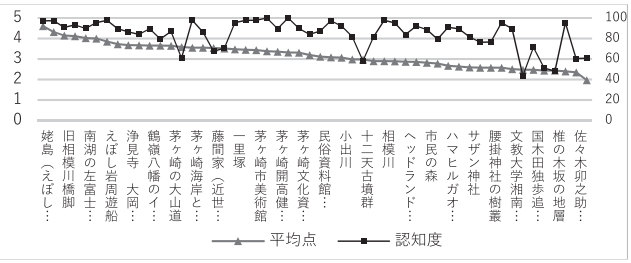
各地の事例についてそれぞれの展示手法を表にまとめた。(表１、表２）様々な手法で展示はされているが、資源同士をつなげた展示はほとんどされていないことが分かった。特に、誘導・案内の情報が少ない。これより、有効な展示のためには、何らかのテーマを掲げる、資源をつなげて解説をする、などつながりを表現する必要があると考える。また、多くの地域は既存の看板が整っているため、それらの統一・活用の検討も有効であると考える。

エコミュージアム名称	展示手法
阿智村全村博物館構想	街中展示型
おおくすエコミュージアムの会	手持ち展示重視型
館山まるごと博物館	手持ち展示重視型
勝山市エコミュージアム協議会	街中展示重視型
朝日町エコミュージアム	総合展示型
ちがさき丸ごとふるさと発見博物館	総合展示型

▲表２　エコミュージアムの展示手法の分類

４．地域資源の価値評価

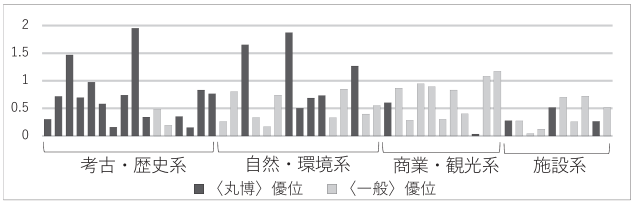
展示テーマは、つながりをもつ展示手法の基礎となる。本項では、茅ヶ崎市民の共通する資源の評価構造を探るため調査結果を分析し、さらに、地域資源の再分類から展示テーマの提案を試みた。まず、結果より全体の地域資源の評価平均点および資源認知度を図（評価平均点の高いものから順に並べてある）に示した。(図４）平均点と認知度は必ずしも一致していないが、評価平均点の上位項目は海に関わるもの、あるいはアクセスがよく道から目立つ資源が挙げられた。一方下位項目には、認知度も比較的低くかつ資源が道から外れて隠れて目立たないものが挙げられた。



▲図４　評価平均点・資源認知度

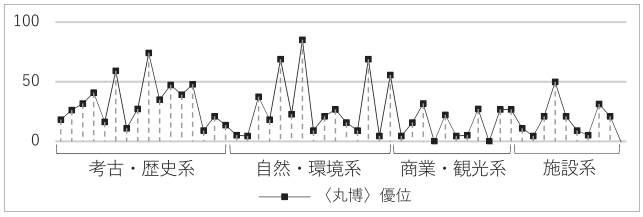
４－１〈丸博〉と〈一般〉の評価の違い

〈丸博〉と〈一般〉の価値評価の相違を明らかにするため、評価平均点差を図に示した。(図５）大きく点数が伸びているものは、グループ間での評価の差が大きく、優位であることを示している。〈丸博〉はより考古・歴史系に、〈一般〉は商業・観光系に高い評価をつけており、グループ間で評価の偏りがあることが分かった。



▲図５　〈丸博〉と〈一般〉の評価の違い

同様に、それぞれの地域資源のグループによる認知度差（〈丸博〉―〈一般〉を正とする）を表に示した。(図６）全体が正を示すことから、〈丸博〉の認知度が全体として高いことが分かる。最も認知度差の大きかった資源は「椎の木坂の地層」であり、〈丸博〉の認知度が90%なのに対して、〈一般〉の認知度はわずか5%であった。



▲図６　〈丸博〉と〈一般〉の認知度差

グループで評価点数の差が大きくなった資源の例を以下の表に示した。(表３)

資源名	認知度〈丸博〉	認知度〈一般〉	認知度差	評価点〈丸博〉	評価点〈一般〉	評価点差
十二天古墳群	95.24	21.05	74.19	3.95	2.00	1.95
椎の木坂の地層	90.48	5.27	85.21	3.37	1.50	1.87
腰掛神社の樹叢	95.24	57.90	37.34	3.40	1.75	1.65
下寺尾官衛遺跡	100	68.18	31.82	4.40	2.93	1.47
駒寄川	95.24	26.32	68.92	2.60	1.33	1.27

▲表３　〈丸博〉と〈一般〉の評価点差と認知度差

評価点数の差が大きかった資源は、認知度の差も大きかった。これは、〈一般〉の認知度と評価点が共に低い資源の中で、〈丸博〉が評価点を高くつけたものが多数あることを示している。

４－２評価の構造

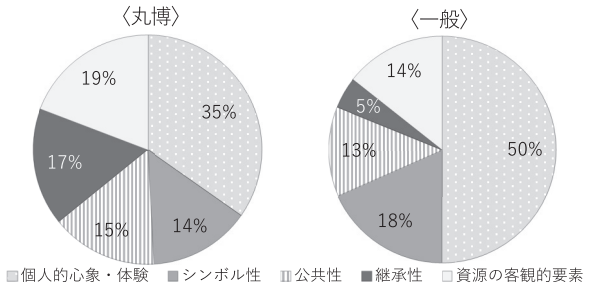
１）評価グリッド法より得られた評価指標を、付置した評価構造図を作成した。(図７、図８)

全体でもっとも多かった指標は「歴史がある」の 28 人で、「大切・貴重なもの」「紹介したい」「ここにしかない」などに関連付けられた。次に「よく利用する」の 26 人が多く、これに 10 人が「なじみがある」を関連付けた。他に「茅ヶ崎のシンボル」と 25 人が回答し、これには 10 人が「海がある」を関連付けた。

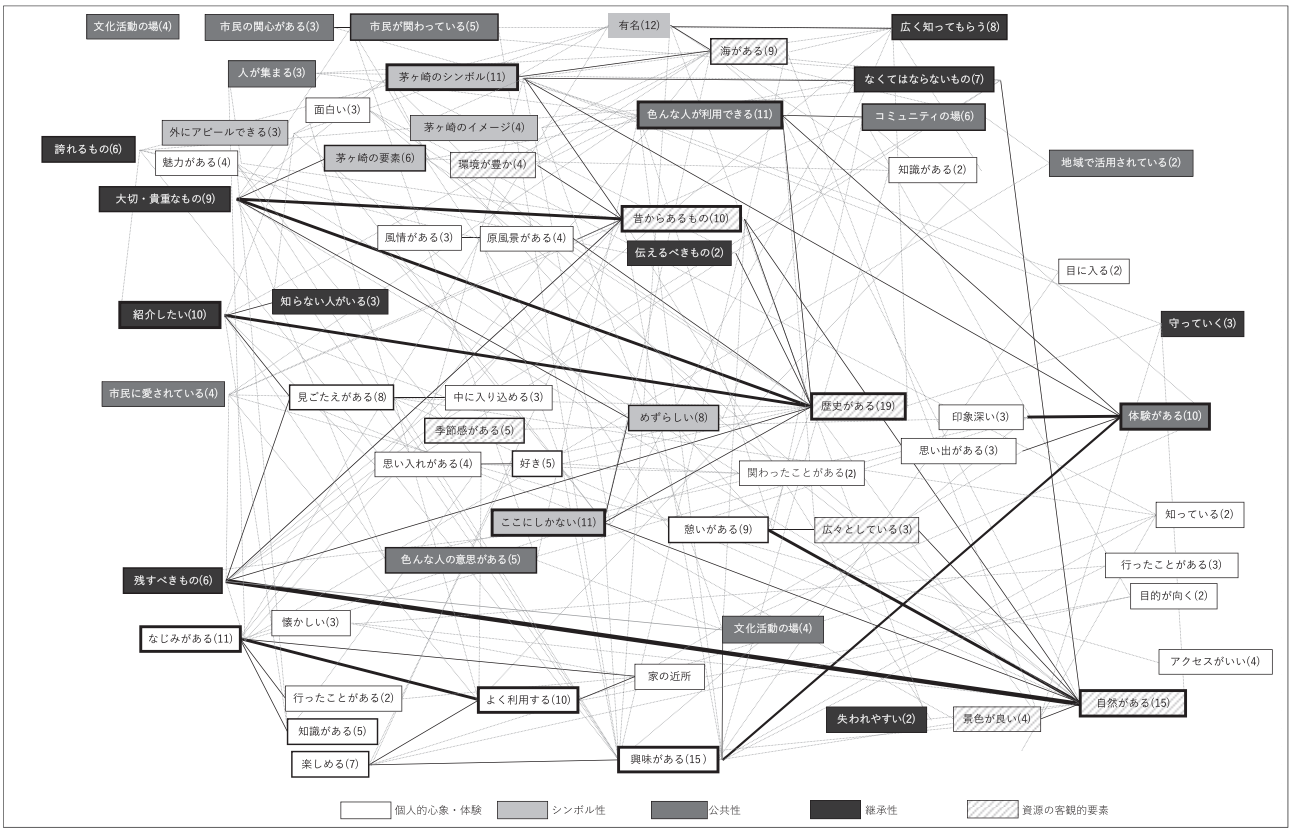
〈丸博〉で最も挙げられたのが「歴史がある」の 19 人で、これに 4 人が「紹介したい」「大切・貴重なもの」に関連付けた。また、「自然がある」と「残すべきもの」に関連付けた人は 5 人いた。

〈一般〉で最も挙げられたのが「よく利用する」の 16 人で、これに 7 人が「なじみがある」を関連付けた。また、「海がある」と「茅ヶ崎のシンボル」を関連付けた人は 6 人いた。

２）これらより、評価指標の軸を「個人的心象・体験」「シンボル性」「公共性」「継承性」「資源の客観的要素」の５つに分類した。キーワード表出数からグループごとの評価指標の割合を図に示した。(図９)〈丸博〉、〈一



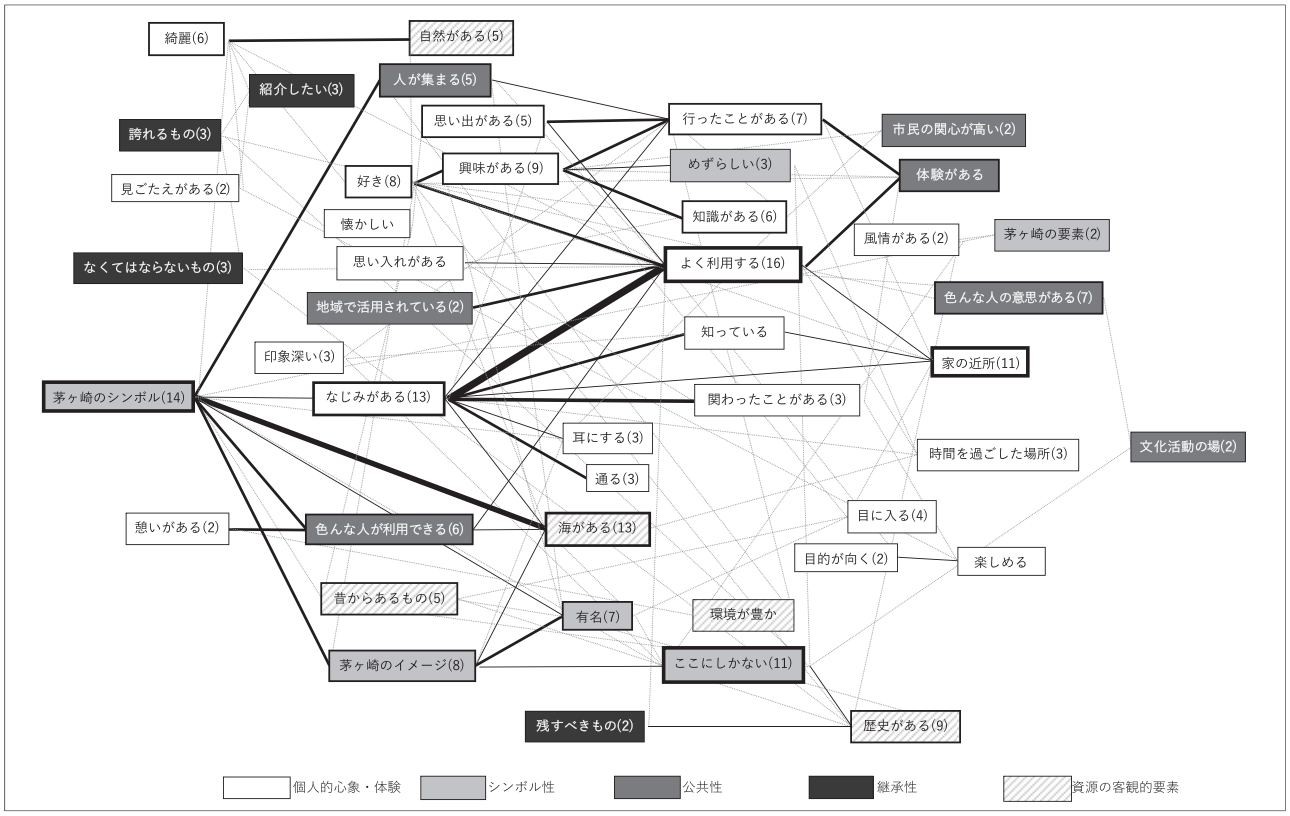
▲図９　〈丸博〉と〈一般〉の評価指標の違い



▲図７　〈丸博〉の評価構造図

線の太さは評価キーワード同士を関連付けた人数に応じて太くしている。10 人以上が挙げた言葉については太線、5 人以上が挙げた言葉については中太線で囲っている。言葉の隣の括弧数字は、それを挙げた人の数を表す。

▼図８　〈一般〉の評価構造図

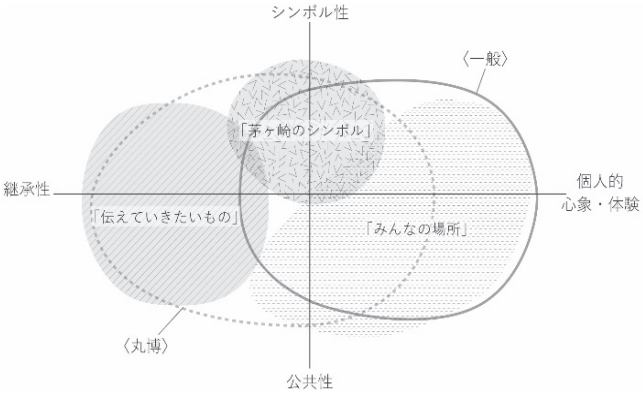


般〉ともに「シンボル性」および「公共性」に関する回答の占める割合はほぼ共通していることが分かる。相違点として、〈丸博〉は「継承性」の回答に重きが置かれており、〈一般〉は「個人的心象・体験」の回答に重きがあると言える。

３）次に、以上の結果から地域資源を評価指標（テーマ）により編成を試みた。(表４）このような展示テーマにはグループにより得意･不得意があると考えられる。(図10) 展示を行う場合、主導するのは〈丸博〉であるため今後テーマに基づいた展示を行う際は一般市民の意識を展示に組みこんでいく必要性があると言えよう。

テーマ	資源の分類	具体的資源
「伝えていきたいもの」	継承性	旧相模川橋脚、下寺尾官衛遺跡など
「みんなの場所」	公共性 個人的心象・体験	えぼし岩、旧相模川橋脚、鶴嶺八幡参道の松並木、旧和田住宅など
「茅ヶ崎のシンボル」	シンボル性	えぼし岩、茅ヶ崎海岸、サザンＣなど

▲表４　展示テーマの提案



５．まとめ

本研究はエコミュージアムの資源をつなげた展示整備の必要性を提示し、地域全体に潜在するテーマを資源の評価構造から見出し、その価値を生み出す展示のあり方を探った。既存のサイン・ガイドブックの中には、誘導・案内の情報が少ないことが分かったので、今後の整備においてはそれらの情報を組み込む必要がある。例えば、ボストンの「フリーダムトレイル」や杉並区の「知る区ロード」のように、関連する資源を結びつけるサインを道路上に直接表示する方法なども有効と考えられる。また、展示テーマを設定していく際には、専門分野を横断した地域資源の再分類が必要と思われる。本研究では評価グリッド法により市民の地域資源の評価構造を明らかにすることで新たな分類を試みた。今後は、ここで抽出したテーマと分類を基に、ハード整備が進めば、地域を面的に捉えた展示が可能になるのではないだろうか。

1）横浜国立大学大学院　都市イノベーション学府
2）地域全体を屋根のない博物館と捉え、地域資源の保存・活用を行うまちづくりの一環の活動。「博物館活動」「住民の主体的参加」「地域資源の現地保存」がエコミュージアムの基本的な構成要素である。
3）P.Davis「Ecomuseums A Sense of Place 2nd」2011、Bloomsbury Publishing、P88-90
4）評価グリッド法とは、1986 年に讃井氏[5]により開発されたインタビュー調査手法。エレメントと呼ばれる刺激を複数提示し、被験者に比較してもらい高く評価された理由を回答してもらうことで、個人の評価認知構造を抽出する。
5）讃井、乾：レパートリー・グリッド発展手法による住環境評価構造の抽出；認知心理学に基づく住環境評価に関する研究(1)、日本建築学会論文報告集、NO.367、1986、P15-21

【謝辞】本研究内で行いましたヒアリングおよび茅ヶ崎市内の調査において、ご協力いただきました皆様に記して深く感謝いたします。